



Data

監督：フォルカー・シュレンドルフ
 原案：シ ril・ジェリー戯曲『DIPLOMATIE』
 脚色・脚本・ダイアログ：シ ril・ジェリー、フォルカー・シュレンドルフ
 出演：アンドレ・デュソリエ／ニエル・アレストリュブ／ブルクハルト・クラウスナー／ローベルト・シュタットローバー／シャルリー・ネルソン／ジャン＝マルク・ルロ

👁️👁️ みどころ

江戸城の無血開城は勝・西郷会談のおかげだが、今日の美しい都パリがあるのはノルドリンクVSコルティッツ会談のおかげ。その特異さは、一方の当事者を、国家や軍の代表でも代理人でもない外交官が務めたことだが、その結末は・・・？

口八丁、手八丁の説得も大事だが、交渉術の根底には真心が不可欠。舞台劇ならではの神経戦と、そこに見る凝縮されたセリフの面白さ・重みを堪能したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■息詰まる神経戦をテーマとした舞台劇が映画に！■□■

ナチスドイツからパリの解放を描いた映画は、『シャーロット・グレイ』（02年）（『シネマルーム2』231頁参照）や『トリコロールに燃えて』（04年）（『シネマルーム6』243頁参照）等、たくさんある。『パリは燃えているか』（66年）は『史上最大の作戦』（62年）ほどの派手さはなかったが、カーク・ダグラス、グレン・フォード、ゲルト・フレーベらがオールスターで出演した同作は、高校時代の私の印象に強く残っている。

そこにも登場していた、ル・ムーリスに駐在するナチスドイツのパリ防衛司令官ディートリヒ・フォン・コルティッツ将軍（ニエル・アレストリュブ）と、スウェーデン総領事の外交官ラウル・ノルドリンク（アンドレ・デュソリエ）との間でくり広げられた「パリ爆破計画」と「その中止」をめぐる息詰まる交渉を描いたのが本作。さらに本作は、シ ril・ジェリーの舞台『DIPLOMATIE』を彼自身の脚本で映画化したものだ。邦画では、軍国色濃い昭和15年のニッポンを舞台に、検閲をテーマとした三谷幸喜原作の舞

台を、検閲官を演じる役所広司と座付作家を演じる稲垣吾郎の2人の主人公で映画化した『笑の大学』（04年）があった（『シネマルーム6』249頁参照）が、本作でも舞台さながらの息詰まる2人の「神経戦」が見モノだから、それに注目！



©2014 Film Oblige - Gaumont - Blueprint Film - Arte France Cinema

■□■フォルカー・シュレンドルフ監督の生涯のテーマは？■□■

「戦後70年」の節目となる2015年の今年は、日中の話し合い、日中融和の「参考」として第2次世界大戦後のドイツとフランスの融和のお話がよく持ち出されている。しかして、ナチス占領下のフランスとドイツの融和というテーマに一生を捧げているのが、ドイツ生まれ、フランス育ちのフォルカー・シュレンドルフ監督だ。1939年生まれのは、前作『シャトーブリアンからの手紙』（12年）でも、「ナント事件」を契機とした、人質の殺害命令に苦悩する人間模様を描いていた（『シネマルーム33』219頁参照）が、本作ではヒトラーに妻子を人質にとられた状態で「パリ爆破計画」を実行すべき立場にある、コルティッツ将軍の苦悩をメインとして描いている。

概して軍人は寡黙なものだが、外交官は弁護士と同じように口での説得が仕事。しかし、そこに説得力を持たせるためには、論理や情が不可欠だし、たまには脅し、すかしのテクニックも……。弁護士の私にはノルドリンクが本作で見せる「説得力」は大いに参考に

なったが、他方、コルティッツ将軍の方はノルドリンクの計算通りに動かされている感が強い。コルティッツ将軍は本来、パリ防衛司令官という立場でのみ物事を決定しなければならないはずだが、ノルドリンクが個人的な「弱み」を見せるにつれて、コルティッツ将軍もパリ赴任前日に公布された「親族連座法（ジッペンハフト）」に苦悩していることを語り、少しずつ「軍人」から「1人の人間」の顔を見せていくことに……。

本作は83分と短い、そこには舞台劇ならではの凝縮されたセリフの面白さと重みがあるうえ、それらのセリフはフォルカー・シュレンドルフ監督の生涯のテーマを反映したものだから、それをじっくりと味わいたい。

■□■勝・西郷会談とパリ会談の異同は？■□■

もし、1868年に江戸城に迫りくる官軍（＝薩長連合軍）と徳川幕府との間で戦争が起き、徳川方がいざという時の備えのために準備していた「焦土作戦」が実行されていれば、江戸は焼け野原になっていたはず。したがって、江戸城の無血開城を実現させた勝海舟と西郷隆盛との会談は、歴史上大きな意義があったわけだ。しかして、そこでの勝・西郷会談と、本作が描くコルティッツVSノルドリンク会談との異同は？

その最大のものは、ノルドリンクがフランスの国民や軍を代表する人間ではなく、単にパリで生まれ育っただけのスウェーデン総領事という身分にすぎないこと。民事事件における弁護士の法的立場は依頼者との委任契約にもとづく代理人だが、本作におけるノルドリンクは誰かの代表者でないことが明らかになうえ、誰を代理しているのかも明らかでない。したがって、コルティッツ将軍は本来、そんな立場の人間を相手に交渉する義務自体がないわけだ。したがって、コルティッツVSノルドリンク会談は、当初「これ以上の話はない。出て行ってくれ」で終わりがけたのだが……。

勝・西郷会談では、勝海舟と西郷隆盛という二大リーダーの能力と個性が江戸城の無血開城を実現させた。また、第2次世界大戦後のフランスとドイツの融和については、フランスのシャルル・ド・ゴール大統領とドイツのコンラート・アデナウアー首相という国家を代表する人間のリーダーシップが際立っていた。それに比べると、コルティッツ将軍VSノルドリンク会談には、何の根拠もなかったが……。

■□■論点1 君が私ならどうする？その答えは？■□■

コルティッツVSノルドリンク会談が当初の「駆け引き」状態から「腹を割った」対話に移行した後の論点1は、コルティッツ将軍からの「命令に従えば家族は無事だ。だが、命令に背けば……。君が私ならどうする？」との問いに、ノルドリンクがどう答えるかということ。

1945年8月15日の昭和天皇による終戦のご聖断は日本国民のためを考えたもので、これは昭和天皇が国民を代表しているとの立場からの苦渋の決断だった。他方、民事事件で代理人として仕事をしている弁護士は、自分の行為による法的効果はすべて依頼者に帰

するから、代理人としての責任は重大だ。したがって、少なくとも私は常に「自分が依頼者の立場だったらどうするか？」を自問自答しながら行動しているつもりだ。ところが、コルティッツ將軍の問いに対して「わからない」としか答えられなかったから、アレレ…。

もっとも、喘息の症状が出たコルティッツ將軍をノルドリンクが救った後には、ノルドリンクはコルティッツ將軍に対して自信を持って「私は外交官だ。軍人じゃない。パリを破壊から救う切り札は1枚しかない。それは君だ」「私が君ならどうするか答えよう。君になるのは御免だよ」と答えたから、なるほど、それはそれで立派な答えだ。

■□■論点2 妻子の安全が最大のポイント？それとも？■□■

ナチスドイツからのフランスへの迫害は『黄色い星の子供たち』（10年）（『シネマールム27』118頁参照）や『サラの鍵』（10年）（『シネマールム28』52頁参照）等、たくさん映画化されているが、逃亡の成功例は少ないはず。したがって、いくらノルドリンクがコルティッツ將軍に対してスイスへの逃亡ルートがあると説明しても、そこに安全性の確証がなければ乗ることができないのは当然。なぜなら、妻子がもし逃亡に失敗すれば「逃げれば、ゲシュタポに追われる。捕まれば、死ぬより酷い事態にもなる」ことをコルティッツ將軍にはよくわかっているのだから。

ここで私が少し疑問に思ったのは、コルティッツ將軍は逃亡ルートの確証さえ得られれば、ノルドリンクの進言に従ってヒトラーの命令に違反してパリ爆破計画を中止するのか否かということ。それは軍人としてあるまじき行為だと私には思えたが、ドイツを発つ2週間前にヒトラーが既に正気を失っていると知ったコルティッツ將軍は、その時点でヒトラーの命令には従わないと決めたそうだから、なるほど、なるほど…。ところが、敵（ヒトラー）もさるもので、「親族連座法（ジッペンハフト）」はコルティッツ將軍が自分の命令に背かないようにするためだけに定めたらしい。したがって、これによってコルティッツ將軍は完全に行動を縛られたわけだが、もしノルドリンクが言う逃亡ルートがホントに安全なら…。

そこで、ノルドリンクがコルティッツ將軍に対して行った更なる説得は「私はこのルートで妻を逃がした。私の妻はユダヤ人だ」というものだったから、ビックリ。しかし、それってホントの話？それとも…？

■□■論点3 「想像力を働かせてみよう」の説得力は？■□■

人間はややもすれば現実に直面する問題だけを見ようとする動物。しかも、それを現在の視点からのみ見ようとする動物だ。そこで必要なものは、想像力。つまり、現実とは異なる世界を想像する力だ。老獪な外交官であるノルドリンクがコルティッツ將軍に対して試みた説得は、ノルドリンクの想像力を高めようとするもの。その具体的なセリフは、「しばし戦争を忘れて、5年後のパリを想像してみてください」というものだった。

そんなシーンを観ながら私が思い出したのは、ジョン・グリシャム原作の「法廷モノ」の代表作の1つである『評決のとき』（96年）だ。同作は『十二人の怒れる男』（57年）と並ぶ陪審映画の代表作であるとともに、『アラバマ物語』（62年）と並ぶ黒人差別映画の代表作だ。若き弁護士ジェイクの最終弁論は法律論を一切カットし、「目を閉じて私の話を聞いて欲しい」と切り出すもの。「少女がレイプされた。悲惨な状況だ。よく頭の中に描いて欲しい・・・」とハートに語りかけるジェイクの言葉に陪審員は引き込まれ、一人ひとりその状況を想定する中、ジェイクは「そして・・・その少女は白人でした」と結んだ。さて、陪審員の評決は（『名作映画から学ぶ裁判員制度』49頁参照）？

しかして、目をスクリーンに移すと、「美しきパリの日常の光景・・・。パリの存続は君次第だ」とノルドリンクから究極の選択を突きつけられる中、コルティッツ将軍が下した決断は・・・？

2015（平成27）年3月18日



©2014 Film Oblige - Gaumont - Blueprint Film - Arte France Cinema